様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６４３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ０２８３８

研究課題名（和文）大学生と高齢者が共に学ぶ学習プログラムの開発と評価

研究課題名（英文）Development and Evaluation of a Collaborative Learning Program for University Students and the Elderly

研究代表者
森　玲奈（Mori, Reina）

帝京大学・公私立大学の部局等・准教授

研究者番号：７０５８８０８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究のフィールドは帝京大学八王子キャンパスであり対象は帝京大学大学生と大学に近接する百草団地に住む65歳以上の高齢者である。具体的には、大学周辺地域に在住の高齢者に大学生がテーマに即したインタビューを行い、聞き取ったエピソードを劇にし公演を大学周辺地域に在住の高齢者に観てもらいディスカッションを行うという活動を行った。質的な分析の結果、高齢者に関心を持つようになる、高齢者に対する否定的な感情が変化するといった理解の深化に関する成果が認められた。一方、高齢者に対しては数回に渡りグループインタビューを行った。その結果、大学生の特徴を理解し、親和的・協調的な意見を持つようにもなったことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本では世界でも類を見ない超高齢化が進んでいる。今後は、エイジングを生涯学習の課題として捉え、多世代共創社会を構築していくことが必要となる。しかしながら、青年期には高齢者に対する否定的意識があることが指摘されている。青年後期である大学生は、高齢者のことをよく知らないために否定的意識を持つ側面がある。つまり、大学生にとって高齢者のことを知ることは良い学習機会となりうる。
本研究で多世代交流学習を実践したことにより、①大学生は高齢者と語り合いその言動を演劇化することで理解が深まった、②高齢者は大学生に自身のエピソードを語ることを通じ大学生に対する親和的・協調的意見を持つようになった。

研究成果の概要（英文）：The field of this study was the Teikyo University Hachioji Campus, and the subjects were university students of Teikyo University and elderly people aged 65 and over living in the Mogusa housing estate near the university. Specifically, the university students interviewed elderly people living in the area surrounding the university on the theme, and then put the episodes they had heard into a play, which was shown to the elderly people living in the area surrounding the university for discussion. The results of the qualitative analysis showed that the participants became more interested in the elderly and their negative feelings towards the elderly changed. On the other hand, group interviews were conducted with the older people on several occasions. The results showed that they understood the characteristics of the university students and also developed friendly and cooperative opinions.

研究分野：老年教育学

キーワード：高齢者　生涯学習　大学生　ワークショップ　演劇　多世代交流　多世代共創　アクションリサーチ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本では世界でも類を見ない超高齢化が進んでいる。今後は、エイジングに関する諸問題を生涯学習の課題として捉え、多世代共創社会を構築していくことが必要となる。しかしながら、青年期には高齢者に対する否定的意識があることが指摘されている（古谷野 2008）。青年後期である大学生は、高齢者のことをよく知らないために否定的意識を持つ側面がある（古谷野 2008）。つまり、大学生にとって高齢者のことを知ることは良い学習機会となりうると考えられる。

一方、高齢者向けの学習を考える際、成人の教育ニーズとは別に、高齢者特有の教育ニーズがあるという議論がある（McClusky 1974：Tam 2014）。その一つが回顧的ニーズ、すなわち人生を振り返って考えるというニーズである（Lowy & O’Connor 1986：堀 2010 ）。加えて高齢者には身体的に負荷の高い活動が難しい可能性もある。そこで、本研究における学術的問いは、青年期である大学生と高齢者が共に学び合う学習プログラムを設計し、そこでの学習を評価することである。

本研究ではインタビュー法とドキュメンタリー演劇（松井 2017）の手法を用い、大学生が高齢者へ過去についてのインタビューをし、聞いたことを大学生が演劇にして高齢者の前で演じる。これにより、高齢者の教育ニーズである回顧的ニーズを満たしつつ、大学生には高齢者への理解を深めてもらうことを考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、青年期の高齢者に対する否定的意識、及び高齢者の回顧的ニーズに着眼し、大学生が高齢者にインタビューすることで両者が協働して演劇を創るアクションリサーチを実施し、そこで何が相互に学ばれているかを明らかにすることである。

これまでも高齢者向けインプロ演劇ワークショップは行われてきたが、国内で多世代での演劇ワークショップ実践が多く行われているとは言い難く、知見としての蓄積に乏しい特に、青年期の高齢者に対する否定的意識に着眼した研究であること、高齢者の回顧的ニーズに着眼した研究であること、その両方を満たす学習プログラムを構成し評価することが、本研究の独自性・創造性となる。

３．研究の方法

本研究で明らかにしたいことは大きく 2 点ある。一つ目には、高齢者と交流したことで大学生にどのような変化が起きるのかを明らかにすることである。二つ目は、高齢者が過去を異なる世代に語り、それが演じられるのを見ることによってどのようなことを学ぶのかを明らかにすることである。分析は、高齢者や大学生の発話を中心にし、質的分析を行うことで、双方の生涯学習に繋がる点を検討していく。

研究代表者は、NPO 演劇百貨店と協働し授業運営・研究を行う。両者ともフィールドの高齢者との交流があり、ラポールが形成できている。

2021 年度・2022 年度・2023 年度で 3 回の学習プログラムを実施する。

【プログラム】

帝京大学秋学期の授業 15 回の中で実践することを考え、このようなカリキュラムをデザインしている。高齢者が語った内容を大学生がシナリオにし演じ、高齢者はそれを見て意見を交換するというデザインである。

①演劇にしたいテーマを決める（高齢者・大学生）
②テーマに沿って大学生が高齢者にインタビューを行う （高齢者・大学生）
③テーマに沿って大学生が高齢者にインタビューを行う （高齢者・大学生）
④テーマに沿って大学生同士もインタビューを行う（大学生）
⑤インタビューをもとにシナリオをつくる（大学生）
⑥シナリオをもとに演劇をつくる（大学生）
⑦シナリオをもとに演劇をつくる（大学生）
⑧高齢者に演劇を途中で見て指摘してもらう（ゲネプロ）（高齢者・大学生）
⑨シナリオをもとに演劇をつくる（大学生）
⑩シナリオをもとに演劇をつくる（大学生）
⑪シナリオをもとに演劇をつくる（大学生）
⑫シナリオをもとに演劇をつくる（大学生）
⑬シナリオをもとに演劇をつくる（大学生）
⑭大学生が公演を行い高齢者が観覧後ディスカッションする（高齢者・大学生）
⑮報告会（ふりかえり）（大学生）

【フィールド】

本研究で大学生と交流を行うのは、東京都日野市百草団地にある「百草ふれあいサロン」に集

う高齢者である。本研究で関わりを持った住民は全て65歳以上の高齢者である。百草団地は1970年に完成し、60年を迎える。最寄りの高幡不動駅から徒歩25分を要する高台の上に位置する。百草団地を含む日野市百草の65歳以上世帯は人口統計課人口調査担当平成27年東京都区市町村町丁別報告によれば73%と高い。百草団地には、多世代型共創社会の基盤となる世代間交流が無いという問題がある。原因として①世代によって生活圏の範囲に差があり日常的な世代間交流が乏しいこと、②積極的に世代間交流を行うメリットが無いこと、が考えられる。

世代を越え相互にメリットのある学習の枠組みを作っておくことで、本地域における高齢者の生涯学習基盤ともなりうると考えられる。

４．研究成果

本研究の実践期間はコロナ禍と重なり、予定通りの遂行が難しかった。その中で、2021年は学習プログラムの実践のみ行い、2022年と2023年の実践をもとにデータ取得と分析を行った。具体的には、公演後に行った学生のみの報告会でのスライド内容および授業終了後のレポートに関しても質的な分析を行った。結果、地域の高齢者に無関心だった学生が関心を持つようになる、高齢者に対し否定的な感情を持つ学生が考えを変化させるといった他者理解の深化に関する成果が認められた。一方、高齢者に対しては数回に渡りグループインタビューを行った。その結果、大学生に対し否定的な感情を持つ部分も依然残ったが、大学生の特徴を理解し、親和的・協調的な意見を持つようになったことが認められた。

研究成果の報告の形として、学会発表の他、「地域の物語を演劇にする2023」という展示を帝京大学総合にて行った。

【参考文献】

堀薫夫（2010)生涯発達と生涯学習　ミネルヴァ書房
小谷野亘（2008）高齢期をみる目: 小谷野亘・安藤孝敏（編）改訂・新老年学–シニアライフのゆくえ. 株式会社ワイルドライフ
松井かおり・田室寿見子著（2017)「ドキュメンタリー演劇」の挑戦. 成文堂
McClusky, Howard Y (1974) Education for Aging: The Scope of the Field and Perspectives for the Future. In Stanley, M. Grabowski and W, Dean Mason (Eds.) Education for the aging, 324-355, New York, NY: Adult Education Association.
Tam, M. (2014) A distinctive theory of teaching and learning for older learners: Why and why not? International Journal of Lifelong Education, 33(6), 811-820.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 森玲奈
２．発表標題 「地域の物語を演劇にする」を通じて学ばれること
３．学会等名 日本演劇学会研究集会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計1件

１．著者名 森玲奈	４．発行年 2023年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 243
３．書名 ワークショップデザインにおける熟達と実践者の育成（第2版）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

帝京大学総合博物館にて2023年に「地域の物語を演劇にする」という展示を行った。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関